

日本のピアニストで中村絃子さんという方がいますが、コンサートで聞いた感想として自分の能力を最大限生かすピアノのだと感じました。ミスタッチが多いピアニストではありますが、ミスタッチを心配して、自分の能力が最大限発揮されないようなピアノをするよりも、そんなことなど気にしないで自分のピアノを弾く能力が素直に発揮されるようにしています。ですから自分のピアノの能力に対して過大評価もしていなければ、過小にとらえているわけでもないために、聞いていた人は感動するのです。しかし私たちは生きていくうえで「こうしなければならない」「こうであるべきだ」と自分を縛るようなマニュアルを作っていないでしょうか。大人たるもの…会社組織たるもの…具体的にあげれば多々あるのではないのでしょうか。またクリスチャン生活もマニュアル化をしやすくなります。祈る方法や言い回し、賛美する方法、信仰生活の中での行い…など。意識的ではなく、自然としてしまっている事が多々あります。それをルールとして決めています。それはミスが起こらないために、問題が発生しないためにルールを作ります。聖書は人生の取扱説明書といっているのですが、マニュアルとは違います。聖書は人間にとって絶対にしてはならないことを教えていてルールやマニュアルとは反対なものです。そして聖書の内容を集約すると**①神を愛し、②隣人を自分のように愛する**ということになります。私たちはこの約束を土台として人生の取扱説明書である聖書を具体的にどのようにしていくのかに努めています。しかしそこからマニュアル化をして、ルールを作っていくと失敗が起こってしまいます。偉大な人物であったモーセであっても、民の要望に答え、水を湧き出させる時、1度目は岩を「叩く」ようにいわれ、神に従いました。しかし2度目は岩に向かって「命じる」ようにいわれたのですが、過去の経験による自分のルールによって岩を「叩いて」しまい、神に従うことができませんでした。神は過去の経験を超えて新しいことをすると語っています（イザヤ43：18～19）また、人々が捨てた石であるイエスキリストこそ、礎の石となりました（詩編118：22）聖書は神のなさることは人が見極めることができないと教えています。ですがマニュアル化したクリスチャン生活では、ダイナミックな神を体験する事ができず、「癒し、奇跡は起こらない」となってしまうのです。（イザヤ53：1～10）この書はメシアがどのように来て、どのような最後を迎えるのかが書かれてあります。そしてBC700年頃に記され、律法学者やパリサイ人はこの事に精通していました。イスラエルを救いに来られる方はどのような方なのか分かっていましたが、信じ受け入れることができませんでした。信じ受け入れたのは異邦人や蔑まれていた人たちでした。イエスキリストは神の方法で地上に現れました。当時の律法学者たちは目に見える“王”というような地位のあるところに生まれてくれば、従うことができました。形式、ルールが尊重されるがあまりに神の方法でこられたイエスキリストに従うことができなかったのです。今日、私たちの人生や教会からこのルールをなくなさいといけません。しかしルールを土台に生きていかなないと無法地帯になってしまいます。そのため私たちは聖書から「自分はこれだけはしてはならない」という土台を見つけ、その上で神の計画を進めていくのです。しかし私たちは「してはならないルール」から「していいルール」に変えてしまいます。そして私たちは今まで行ってきたやり方を変えることには抵抗します。そのやり方で大成功しているならともかく、そうではないのであれば素直に神の方法へと変える必要があるのです。それなのに私たちは不平不満を言いながら行っています。それでは意味がありません。ですから本当の「してはならない」ルールを聖書の中から見出し、「神を愛し、隣人を自分のように愛す」を土台として正しいのか正しくないのかを判断していきましょう。そして注意が必要なのは私たちは新しいルールに従って歩みだしますが、古いルールへとすぐに戻ってしまうことです。これは神の働きを小さくしてしまうものです。神の力に限界や制限を設けることとなります。神の方法がなるために！**①現状で判断しない！**現状とは今、目に入ってくる事柄です。目の前に起こることがすべてであるように思わせて、騙そうとします。ダビデとゴリアテの話が聖書に書かれていますが、イスラエル軍やサウル王は目の前に起こる現状しか見る事ができず、右往左往していました。しかしダビデは現状を見るのではなく、神を見続け勝利を得ました。私たちは現状を見て神が見られなくなってしまいます。目の前に起こることによって人によっては激情するタイプもいれば、心が萎えてしまう人がいます。最終的に自分はダメなのだと思ひ下、逃避へ向かっていきます。神はそのことを通して、大きく成長させます。私たちはこの事を通して神は何をしたいのかを考えながら進んでいきましょう。神さまの方法がなるために**②途中でつぶやかない**。私たちはとかく“ぶつぶつ”言いながら、渋々行うようなことはないでしょうか。それも完成する前の“途中”でつぶやいていませんか。これは絶対にやめないといけません。周りに愛を流すのですが、つぶやきながら行う心がいけないのです。そしてつぶやきなら中途半端で終わらせてしまっているようなことはないでしょうか。神が願っていることは素直に心から従う事ができるようになるようになり、神の計画を完成させてほしいのです。ですから私たちは喜びながら従っていきましょう。（詩篇106：21～25）出エジプトした民は男だけで300万人といわれていますが、カナンに入国できたのはごく僅かでした。つぶやくと恵みが逃げていきます。神さまの方法がなるために**③領域から逸脱しない！**（ユダ1：6）自分の領域を逸脱したために、天使は悪魔になってしまいました。神の被造物であるにも関わらず、自分が神になろうと思ってしまったのです。これが天使から落とされた理由です。悪魔が人を誘惑するのは、神が愛した人を妬み、憎んでいるからです。領域を逸脱する方法の1つは「傲慢になること」です。私はこれをする立場でない、もっと大きな事をするはずだと思ふことです。2つ目は「自分の与えられている能力を過小評価すること」逸脱する理由になります。私たちは神に非常に良く造られたのです。自己卑下し、能力がないと言ってしまふことは神からでた思いではありません。悪魔は私たちを騙そうとして現状を見せてきます。優越感と劣等感の間で自分の領域を狭く限定して生きていくようにさせます。私のすることは私しかできません。それを小さくしていませんか？反対に高ぶり大言壮語するものになってもいけません。神に働きを荷なうためには、自分の方法である今までのマニュアルを捨てて、神の方法で荷っていきましょう。（要約者：平澤一浩）